1.2.5 故人はどこに？
――オンライン空間における死者との向き合い方

宮澤　安紀

1. はじめに

私たちが死者を弔い、その死を悼む方法は、私たちを取り巻く社会や環境の変化、そして絶えざる技術革新によって常に時代とともに移り変わっている。例えば、路面電車や自動車など交通網の発達によって、かつて死者を送る儀礼として葬儀に重要な位置を占めていた葬列は交通の妨げと見做され、最終的には霊柩車による会場間の移動へと完全にとって代わられた[井上章一 2013]。また 19 世紀に登場した写真技術も、かつて死者の表象として重要であった位牌よりも、遺影を中心とする葬儀祭壇や家内祭祀へと追悼空間を変貌させている[山田 2011]。こうしたなかで、私たちの生活を根底から変えたと言えるのが情報技術の進展、とりわけインターネットの普及だろう。インターネットの原型となる ARPA ネットが 1960 年代のアメリカで開発されて以降の展開は目覚ましく、コンピュータやソフトウェア性能の向上を背景として、1990 年代にはワールド・ワイド・ウェブ（WWW）が急激に普及、インターネットの利用は一気に大衆化した[中野 2017]。2019 年の総務省の調査によると、日本におけるインターネットの利用率は 13 歳～59 歳の幅広い年齢層ですでに 9 割を超えており、70 歳以上においても上昇傾向にある[1]。さらに情報技術におけるハードウェアとしての携帯電話の普及も進み、2007 年に Apple 社の iPhone が登場して以降は、どこからでもインターネットに接続できるスマートフォンも生活に欠かせないものになっている。日本ではスマートフォンの所有率は個人の場合には 77.3%、世帯単位では 90.1%となり[2]、もはやスマートフォンなしに生活している人を探す方が難しくなっている。こうした高性能な情報端末の普及は手軽な写真や動画の撮影を可能にしたほか、メールや SNS を通じた時や場所を選ばない情報の共有や人の交流をもたらし、私たちのコミュニケーションのあり方にも大きな影響を与えている[3]。このような状況において、SNS を通じての葬儀・告別式の通知、web ページを利用した葬儀・霊園に関する情報収集、葬儀や法要のストリーミング配信、オンラインでの遺族会など、情報技術が葬送や弔いの方法に与えた影響は数えきれない。社会における死者のあり方は、その社会が利用可能なコミュニケーション技術・情報技術に左右されるという指摘は、とりわけ技術発展のスピードが著しい現在では重要な示唆である[Walter 2015b]。

以上を踏まえ、本稿ではインターネット技術が生み出した新たな故人の追悼様式に着目する。従来、死者を弔い、故人を思い出す手段としては、日本では墓参りや仏壇への参拝が

---

[1] 総務省 2023 年 5 月 29 日「令和 4 年通信利用動向調査の結果」
https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/data/230529_1.pdf, 2024.3.20 最終アクセス。

[2] 同前。

[3] なお、2022 年には個人の SNS 利用率は 80%に達している。同前。

あったが、それらの実践は近年、家墓維持の困難や仏壇保有率の低下など、さまざまな社会的変化によって変容を迎えつつある。遠方への墓参が困難であったり、位牌が死者の依代としての意味づけを失いつつあるなかで、「死者そのもの」としての遺骨を身近に置く「手元供養」の実践も広まっている[井上治代 2004][内藤 2013]。こうした状況において、私たちはどこで死者と出会い、死者へ語りかけ、記憶を共有していくことができるのだろうか。時間や場所、物理的な制限を超越したインターネットという空間は、死者と接する私たちの体験をどのように変容させるのだろうか。本稿ではこうした問いから、インターネット上で死者を追悼するための空間として作られたオンラインメモリアルサイトを取り上げ、日本での実施例から今日の情報化社会における生者と死者の関わり方について考察する。

本稿の前半では、オンラインにおける故人の追悼に関して主に欧米で行われている議論を参照しながらその特徴についてまとめる[4]。後半では日本におけるオンラインメモリアルサイトの事例として、スマートシニア（株）が運営する「想いでサイト」を取り上げ、その利用の具体例を欧米の議論とも接続させつつ分析し、情報化社会における死者の追悼のあり方を考察していく。

2. オンラインにおける追悼

2-1. オンラインにおける追悼様式の分類

1990 年代半ばからインターネットの利用が一般化していくにつれ、インターネットや情報技術と死、死者、死にゆくこと、悲嘆等に関わる研究は、欧米圏では分野を問わずかなり盛んに行われるようになっている。もとより Thanatology や Death Studies と名指されるような死にかかわる研究群は、病理学、心理学、文化人類学、宗教学、社会学、考古学、史学など多様な分野にまたがる学際的な領域ではあったが、インターネットや SNS などの利用の普及により、2000 年代以降は情報技術やメディア研究の観点からも、死や死別をテーマとする研究が増加している状況にある[宮澤 2020: 229][5]。

---

[4] インターネットという新たな空間において死者との関わり方や喪のあり方がどのように変化しているのかという観点については、欧米ではすでに 1990 年代から盛んに議論が進んでいる一方（例えば Pamela Roberts による一連の研究など）、日本では主に死者の人権やデジタル遺品にかかわるプライバシー管理の観点からの研究が多い。

[5] 例えば死生学の分野で代表的なジャーナルの *Omega*、*Bereavement Care*、*Mortality*、*Death Studies* でも、それぞれ 2004 年（vol.49 Issue1）、2012 年（vol.3 no.2）、2015 年（vol.20 Issue 4）、2019 年（vo.43 no.7）に、インターネットなど情報技術をテーマとした特集号が組まれ、また 2013 年には「デス・オンライン・リサーチ・ネットワーク（DORN）」がコペンハーゲンに設立され、2014 年にはイギリスのダラム大学で第 1 回目のシンポジウムを開催している。“Death Online Research Network” https://cc.au.dk/en/research/research-programmes/cultural-transformations/cultures-and-practices-of-death-and-dying/dorn, 2023.3.1 最終アクセス。日本でも 2018 年に情報処理学会の機関紙『情報処理』にて、「弔い」をテーマとした特集が組まれたことがある（情報処理学会『情報処理』Vol. 59(7)、通巻 640 号、2018 年）が、日本ではどちらかと言えば死後のプライバシー権やデジタル遺品の扱いなど、デ

こうした研究のなかで言及されるインターネット空間で死者を追悼する様式については、インターネット技術が私たちの死に方や弔いのあり方に与える影響を分析したウォルターら（2012）の整理によると、悲嘆に特化したものとそうでないもの、また意図的な追悼と意図的ではない追悼という基準によって以下のように分類できるという[Walter et al. 2012: 7-8]。

まず一つ目の「悲嘆に特化したサイトにおける意図的な追悼」の例としては、1990 年代から現れるようになるサイバー墓地（cyber cemetery）における追悼がある。この時期に登場したサイトには、The Virtual Memorial Garden(1995)、MuchLoved(1998)、HeavenAddress(2009)などがあり[Arnold et al. 2018]、故人の生没年日や追悼文が掲載できるほか、訪問者がバーチャルの花やキャンドルを手向けたり、メッセージを残すことができる。こうしたサイトは誰でも利用できるものだが、特に対面の関係性においては承認され難い死（ペット、AIDS 患者、有名人など）を悼もうとする人々に人気が高いという。実際、The Virtual Memorial Garden では突然の死や不可解な死に対しての悲しみを表現する場になっていたり、行方不明で死んだと思われるペットのための利用も多いという[Marshall 2000]。こうしたサイバー墓地に加え、歴史的な出来事や事件で亡くなった一般の人々を追悼するサイトもあるという（アメリカの例ではベトナム戦争で亡くなった米兵やホロコースト犠牲者など）。近年の事例で言えば、COVID-19 で亡くなった死者の追悼サイトもこれにあたると思われる[6]。またそれほど政治的でない媒体としては、新聞などの従来メディアが作成する著名人の追悼サイト（tribute site）も挙げられている。

二つ目の、「悲嘆に特化していないサイトにおける意図的な追悼」としては、SNS やゲームサイトなど、ユーザーたちが相互に交流している場において、あるユーザーの死を他のユーザーたちが追悼して悲嘆を共有する場合や、ユーザーが自分のアカウントに「RIP Granny（おばあちゃん、安らかに）」などのフラグをつけて、自分が喪中であることを示す場合などがあるという。特に Facebook のような世界中で広く普及している SNS では、利用者が亡くなった場合にその故人のアカウントを友人や家族が追悼の場として残せるような制度を整えており[瓜生 2023：20]、活発な利用の状況が伺える。

ジタル技術がもたらした新たな法的問題に関心が注がれているようである。

[6] Covid-19 犠牲者の追悼サイトはさまざまな国や地域で、さまざまな団体によって運営されている。例えばイギリスでは聖ポール寺院が作成した Remember Me Memorial Book (https://www.rememberme2020.uk/)が、アメリカではシカゴ市が作成した Memorial Wall (https://www.chicago.gov/city/en/sites/covid-19/home/memorial-wall.html)や、テキサス大学リオグランデバリー校が作成した COVID-19 Remembrance（https://www.utrgv.edu/covid-memorial/index.htm）、またアメリカ在住の夫婦がアメリカ全土の犠牲者のために立ち上げた COVID-19 Wall of Memories (https://covid19wallofmemories.org/)などがある。さらにパンデミック以前からメモリアルサイトを運営していた Forever Missed が犠牲者専用のページとして設置した Covid-19 Victim Memorials (https://www.forevermissed.com/coronavirus-victims-memorials)や、地域を問わないユニバーサルなデザインの The COVID Memorial(https://thecovid.memorial/)などもある。

そして三つ目の「悲嘆に特化していないサイトにおける意図的ではない追悼」とは、オンラインに残された故人のさまざまな情報が、インターネットを通じてさまざまな人の目に触れるような場合である。それらはオンラインにおける追悼の対象になることもあるが、多くの場合はサイバースペースに漂い、見知らぬ人によって無作為にアクセスされるだけになる可能性もあるという。

以上を踏まえ、本稿で言及するオンラインメモリアルサイトとは、一つ目の「悲嘆に特化したサイトにおける意図的な追悼」に分類されるものとして扱うことにする。しかしひとつ注意しておきたいのは、ウォルターらが提示するこのような追悼の様式は、主に欧米における死亡記事（obituary）の文化に大きな影響を受けながら発展したと思われる点である[7]。例えばサイバー墓地の走りとして知られる The Virtual Memorial Garden の設立者 L・マーシャルは、このサイトを立ち上げるきっかけとして、ウェブ上で著名人の死亡記事を作成し追悼文の投稿を呼びかけたところ、むしろ自分の家族や友人など一般の人々に向けた投稿が多かったことを回顧し、そのような人々のためにサイトを立ち上げたとしている[8]。実際、多くのメモリアルサイトでは、一般的な死亡記事のように、故人の生没年日とともに故人の来歴や功績、家族関係などが掲載され、訪問者は思い思いの追悼文やメッセージを投稿している。たとえ有名人ではなくても、故人の生きた証として、彼らの人生の軌跡や功績を公に残し、多くの人に知ってもらいたいという発想がその根底にあると思われる。

一方で日本にも、これまで主に寺院が展開してきた「ネット霊園」「バーチャル霊園」などと呼ばれるサービスがある[9]。これらはオンライン上の「霊園」にアクセスし、それぞれの「墓碑」のリンクをクリックすると、墓石や位牌のイラストが表示され、オンライン上で線香を供えたり、お経をあげたりすることで「お参り」ができるものである。故人を紹介するスペースというよりは、現実で行う墓参りや供養の実践をヴァーチャルで再現しようとしたものとして考えられる。実際、日本で「ネット霊園」を検索すると、だいたいにおいて

---

[7] 欧米の新聞社には、著名人などが亡くなった際に死亡記事を執筆する専門の部署や記者がいるほど死亡記事文化が定着している。死亡記事は単に故人の来歴を記すだけでなく、故人の人物像を深く取材したうえでその人生を鮮やかに再構成し、読む人に啓発やユーモアを与えるものとして書かれる。The New York Times の死亡欄は人気が高く、そこに掲載された死亡記事をまとめた書籍も出版されている（William McDonald (ed.) 2016 *The Book of the Dead*, The New York Times）。

[8] The New York Times, 1997.9.17 “THINGS; A Resting Place In Cyberspace”, https://www.nytimes.com/1995/09/17/archives/thing-a-resting-place-in-cyberspace.html, 2024.3.30 最終アクセス。The Virtual Memorial Garden はこの種のメモリアルサイトとしては最初期のものであるにもかかわらず、ペット専用の追悼スペースまで作っている。The Virtual Memorial Garden (http://catless.ncl.ac.uk/vmg/, 2024.3.30 最終閲覧）

[9] たとえば宝性寺「Web お参り」（https://www.894.or.jp/virtual, 2022.1.18 閲覧）、観音院「ネット霊園」（https://www.kannon-in.or.jp/cenotaph/index.html, 2022.1.22 閲覧）など。なお、日本にはほかにも、「もやいの碑」で有名な巣鴨の功徳院の松島如戒氏が発案した、「インターネット上に建立されたお墓」である「サイバーストーン」がある（https://www.cyber-stone.jp/HP/index.html, 2024.3.30 最終アクセス）。

①実際にある墓を遠方からインターネット経由で墓参するサービスと、②インターネット上の仮想空間に墓を作るサービス、という説明がなされており、「悲嘆に特化したサイトにおける意図的な追悼」は、このうちの②にあたるものとなるが、そこで前提とされているのはやはり墓の存在である。興味深いことに、日本型のネット霊園にも欧米型のメモリアルサイトと同様、故人の思い出の写真が閲覧できるスペースや「記帳」によってほかの「参拝者」と交流する機能も備えており、機能としては似通っているが、しかしながらその根本にある発想は、両者においてはかなり異なると考えられる。

2-2. オンライン空間における追悼の特徴

それでは、これらインターネット上の仮想空間での追悼は、これまでの追悼のあり方とどのように異なるのだろうか。この点について、欧米では 1990 年代の後半以降、かなりの数の研究が重ねられているため、ここではそれらに即して簡単にその特徴をまとめたい。

まずオンラインにおける追悼の特徴としてまず挙げられているのが、幅広いコミュニティにおいて悲嘆の共有が可能だという点である。ウォルター（2015a）が指摘するように、前工業化社会において、死別の悲嘆は家族や地域共同体など、お互いが顔見知りの緊密な人間関係のなかで共有されるものであった。しかし長寿化、都市化や工業化に伴う職住分離や人口の流動化により、20 世紀に入ると、喪主が故人の子供であっても独り立ちしてから両親と別居の期間が長く、すでに別の場所で新しく人間関係を築いている場合など、個々人の社会的ネットワークがバラバラに形成される状況が出現する。こうした例では、離れて暮らす遺族は一度葬儀で集まったとしても、またすぐに故人のことを全く知らない人々のなかに戻って生活を続けなければいけないため、悲嘆は共有されるものではなくプライベートなものになっていく。つまり「主要な服喪者が分散し、社会的ネットワークが分断されればされるほど、悲しみはより私的なものにな」り、そしてまた悲嘆を抱える人は――悲嘆のあり方を強要されない代わりに――孤独に置かれるというのである[Walter 2015a: 12]。

ところが、インターネットという環境は、こうした死別の悲嘆を取り巻く状況を大きく変化させる。いつでもどこでも、そして誰でもが生成しアクセスできるオンラインでの追悼は、もはや喪に服すべき人を限定せず、悲嘆の共同体を無限に拡張させる可能性を秘めている。例えば Facebook などの SNS で故人の死亡や思い出が投稿されると、知り合いや友人だけでなく、一度も故人に会ったことのない人までもがお悔やみのメッセージを残し、ともに悲嘆を共有する一員となる[Walter 2015a: 14]。また、これまで遺族よりはその悲嘆が軽視されてきた友人なども、オンライン空間では自由に故人への弔意を表すことができる。悲嘆はもはや、プライベートなものではなく、オンラインという空間で再び公に共有されるようになっているというのである[Walter et al. 2012: 12]。

また、もう一点オンラインの追悼の特徴として指摘されているのは、生者と死者のつながりの強さである。西洋社会では 20 世紀以降、Z・フロイトによる「悲哀とメランコリー」（1917）の影響下で、生者が故人の死後も死者と何らかのつながりを保とうとするのは、す

でにこの世にいない存在への執着であり、故人のいない生活への適応を妨げるものとみなされてきた[坂口 2022]。しかし近年、そうした一面的な悲嘆の理解を基にした近代のグリーフモデルは、D・クラスらが提案した「継続する絆（continuing bonds）」モデルにより再考されており[Klass et al. 1996]、死者とのつながりを保とうとする行為は、必ずしも治療や介入を必要とするものではない、自然な振る舞いであることが了解されるようになってきた。そしてオンライン上における生者と故人への関わり方には、故人への直接的な語りかけという形で、この「継続する絆」が見られるのだとしばしば論じられている。

例えばマドレル（2012）は、オンラインの追悼ページで故人との思い出を共有したり、故人への近況報告をするような投稿を取り上げ、これらが生者と死者の「絆が明確に続いていることを示している」と述べている[Maddrell 2012: 50-51]。またキャスケット（2012）は、オンラインでの追悼様式として特に Facebook を取り上げ、その投稿に二人称（故人に対して「you」の表現）の語りかけが 77%と最も多いことなどを指摘し、Facebook が生者と死者のつながりを保つ媒介（medium）となっていると論じている[Kasket 2012：68]。人々が互いに離れた場所で生活し、それぞれ異なる社会的ネットワークを構築している現代社会において、西洋社会の文脈ではキャスケットが指摘するように、「ソーシャル・ネットワーキングの存在は、地理的な隔たりや社会的な分断による制約、すなわち死者について語ること、さらに死者に対して語りかけることに与えていた制約を、根本的に変えてしまう」のである［Kasket 2012：67]。

しかしもちろん、こうした変化は必ずしも良い面だけをもたらすのではない。故人を偲ぶ方法は人それぞれであるため、SNS などのパブリックな場で悲嘆の共同体の範囲が拡大するということは、異なる属性や価値観を持つ人々（例えば両親と友人、信仰を持つ人と無神論者など）が、お互いの喪のあり方に違和感を覚え、ときには対立的な感情をもたらす事態にもつながる［Walter 2015b: 19-21]。また、死の直後はたくさんの服喪者のコメントで溢れていた追悼アカウントがあったとして、なかには追悼アカウントから次第に距離をとることで死の悲しみを癒そうとする人が出てくる一方、訪れる人の少なくなったアカウントは遺族にショックや憤りを与えるかもしれない[Bell et al. 2015:384-385]。さらにオンラインに残された故人のさまざまな情報やメッセージは、生者と死者との継続的なつながりを可能にする一方、写真と違って色褪せないデジタルデータや、SNS の機能による故人のアカウントに関連する通知は、いつまでも故人の存在を鮮明に突きつけ、残された人の喪の期間を否応なく引き延ばす可能性も持つ[Brubaker et al. 2013: 158]。

このようなインターネット空間における追悼のあり方は、「誰でもが」参加できる公共性を持ちつつ、オンライン特有の匿名性や自由な表現の仕方から、多元的な喪の空間を作り出している。それぞれのメモリアルサイトや SNS の仕様によってその使い方も千差万別であるが、インターネットというバーチャルな場が利用可能な時代における生者と死者、そして同じ喪に服する人との交流の仕方は、やはりそれまでの社会とは大きく異なるものとなっていることがわかる。

3. 日本におけるオンラインメモリアルサイトの事例

3-1. スマートシニア（株）の「想いでサイト」

上記のようなオンラインの追悼をめぐる議論を踏まえ、本節では日本において継続的にオンラインメモリアルサイトを運営している企業のひとつ、スマートシニア（株）の「想いでサイト」を事例として取り上げる。スマートシニアはアメリカで展開している Forever Missed というオンラインメモリアルサイトのプラットフォームを利用し、ライセンスを取得したうえで日本向けにカスタマイズして提供しており、欧米型のメモリアルサイトが日本の土壌でどのように活用されているかの事例として興味深い。

スマートシニア（株）は 2019 年に藤澤哲雄氏によって設立され、エンディング産業に IT 分野から参入している比較的新しい企業であり[10]、Forever Missed のプラットフォームを利用したメモリアルサイト「想いでサイト」の運営を主な事業としている。藤澤氏によれば、2011 年にスティーブ・ジョブス氏が亡くなった際、Apple 社が彼を追悼するためのメモリアルサイトを立ち上げたことにより欧米ではサービスが浸透し、アメリカでは無料・有料のものも含め 10～30 社ほどが存在しているという。アメリカ在住歴のある藤澤氏は、当地の病院でこのオンラインメモリアルサイトの存在を知り、日本に導入したという経緯がある。想いでサイトのカウントによれば、2024 年 3 月 28 日現在、1,410 のページが作成され、20 万 2 千を超える訪問数と 1 万 8 千を超えるメッセージが寄せられている[11]。

このように、アメリカで作成されたプラットフォームを使用している想いでサイトの追悼ページは基本的には個人を単位として作成され、見た目は Facebook のアカウントページに近い。一つの追悼ページは「ホーム（about）」と「歩み（life）」、「アルバム（gallery）」、「思い出（stories）」の 4 つのカテゴリから成り（括弧内はアメリカ版での名称）、「ホーム」には生没年日などの故人の説明や訪問者からのメッセージが、「歩み」には故人のライフヒストリーが、「アルバム」には写真や動画が、「思い出」では訪れた人によって故人の思い出がシェアできるようになっている（写真 1）。本節ではこの欧米型の想いでサイトが日本においてどのような使われ方をしているのか、具体的なデータを使って見ていきたい。

---

[10] スマートシニア（株）の藤澤哲雄氏への聞き取りは、2021 年 12 月 9 日にオンラインにて行った。本稿におけるスマートシニア、および想いでサイトに関する記述は、調査時点での情報になることを断っておきたい。

[11] 想いで.com「追悼サイト」https://www.tsuitonet.com/, 2024.3.28 最終アクセス。なお、筆者は 2022 年にも 1 月にも同サイトの利用数を確認しているが、その際は 806 のページ、6 万 4 千を超える訪問数と 1 万を超えるメッセージがカウントされていたため、この 2 年の間にサイトの利用者数は確実に増えていることがわかる。

(写真 1)藤澤氏が公開している個人利用の事例。
「想いでサイト」より。

3-2. 「想いでサイト」の使用例①悲嘆の共有と死者との関わり方

2023 年 3 月 22 日現在、想いでサイトで一般に公開されているページは 197 件である。今回はそのうち、著名人のライフヒストリーや自分史、家族史等の目的で作成されているページを除いた、故人の追悼を目的としたページ 52 件を分析の対象とする[12]。ただし、想いでサイトはそれぞれのページで公開／非公開が選択できるため、ここで取り上げるような一般に公開されているページは想いでサイトに登録されている追悼ページ全体の 5 分の 1 程度に過ぎない。したがって以下で示すデータは必ずしも想いでサイト全体の傾向を表すものではないことは断っておきたい。

さて、この 52 件のうち、「ホーム」にメッセージが投稿されている追悼ページは全体の半数程度の 27 件で、この 27 件のページに投稿されているメッセージの数は計 181 件である。なお非公開ページも含めた全体でみると、1,047 件のページに対し 13,904 件の投稿が行われているので（2023 年 3 月 30 日時点)、非公開のなかではかなりの投稿が寄せられている様子が推察できる。

故人一名の追悼ページに対し、大抵の場合は 1～5 件程度の投稿が行われているが、なかには少数ながら 20～30 以上のメッセージが寄せられているページも存在する（表 1)。特に早くして亡くなった故人のページには、家族だけでなく友人・同僚・知人なども含め、メッセージが集まりやすい傾向にあるため、死亡の状況によって投稿数に大きな偏りが生じてしまう。そこで本報告では、偏りを踏まえた数値を示すよりも、前節で提示した論点を考察するために、それぞれの追悼ページに寄せられた投稿メッセージを質的に分析することとする。

投稿数	追悼ページ数
1～10	23
11～20	1
21～30	2
31～40	0
41～50	0
50以上	1

（表 1）投稿メッセージ数別の追悼ページの数

[12] ただし、ペットの追悼や、「逝去」等の情報がなく自分史との区別がつかなかったページは除いている。また日本の文化的傾向を調べるため、日本人以外の追悼ページも除いている。

（1）悲嘆の共有について

西洋社会におけるオンラインでの追悼では、これまで喪に服す者としては周縁的と思われてきた友人や知人が、自由に弔意を表すことができる点が特徴的であると指摘されているが、この点は想いでサイトでも共有されている。例えばある団体の座長を務めているなかで急逝したA氏のページ（投稿数29）には、団体関係者が次々と故人との思い出（長文のものも多く含まれる）を投稿し、またそれに対しA氏の妻も謝意を示す投稿をしており、悲嘆が幅広い関係性において共有されている様子を見ることができる。しかもコロナ禍での急逝ということもあり、投稿者の多くは葬儀には参列していない人々であることもうかがえ、葬儀という場に制限されない服喪者同士の交流の様子がわかる。さらにA氏に対しては、投稿者の多くがA氏との出会いや感謝を書き連ねており、メッセージ欄はあたかも参列者による弔辞の陳列場のようになっている。一般的な葬儀で披露される弔辞が、故人との関係性や社会的立場から選ばれた、限られた人のみによって読み上げられるものであることを考えると、想いでサイトの空間は、誰でもが――たとえ一度しか故人と会ったことのない人であっても――フラットな立場で故人への思いを披露し合える場を可能にしていることを示している（図1）。

Aさん。

今生ではもう関わることができず寂しいです。誰に対しても献身的で、愛に満ちた優しすぎる方でした。こんな自由な私をあんなに受容してくださる人はいませんでした。

…（中略）…

寂しくて涙が止まらないのは私都合の自己愛かもしれない。でもそんなことを感じている人がきっとものすごく大勢いるんだろうと思います。

コロナでセレモニーなどできないでしょうが、私は誰かと忍ばせてもらいたいので投稿してみます。私のロールモデルになったばかりなのに！まだ全然知らないくらいの方だったのに。

特に奥様には敬意を表します。A さんは、奥様のことをすごく嬉しそうに誇らしげに語っていました。理想の夫婦でした。Aさんと一回しか会ったことないけどじわじわ羨ましく感じてました。

袖すり合うほどのお付き合いでしたが、私には近年最大の恩師くらいに思っていたのに… 早すぎます。

でもそれほど遠くもない未来に私もそちらの世界に行くのですから、泣くのは今日限り。Aさんの“遺伝子”のようなものを受け継ぐのを使命の一つにいたします。多分できないでしょうが頑張ります。

Aさん、ほんとうにありがとうございました。安らかに。

（図1）A氏の追悼サイトに投稿されたメッセージの例。（故人の名前や個人情報に関わる部分は引用者によって編集済み）

（2）死者への語りかけについて

また、今回分析した投稿メッセージのなかでも、「（故人の名前）へ」などの記載で示されるように、死者に向けたメッセージとして解釈できる投稿は181件中123件にも及び、やはり故人に語りかける場としてのオンラインメモリアルサイトという特徴を見ることができる。なかには「これからもしっかり見守ってください。keep in touch!」や、「いつでも帰ってきてね」「今年もよろしくね」「（故人の名前）さんお元気ですか？」など、まるで死者

が現在も生きており、生者とコミュニケーションが取れる存在であることを想定したようなメッセージも投稿されており、マドレルやキャスケットが論じた生者と死者の「継続する絆」がきわめて強く見られる。

特に、18 歳で急逝した M 氏のページに投稿されたメッセージは、55 件全てが故人への直接的な語りかけとして寄せられており（2023 年 3 月 22 日現在)、しかもそれらの多くは家族ではなく友人たちから寄せられたものである。メッセージの投稿は、同一人物から何度も送られている場合もあり、そのような投稿主のなかには自身の恋愛関係を故人に相談している例もある。友人たちは家族以上に、故人への強烈な思いを定期的に投稿しており、死者とのつながりが追悼ページへの投稿という行為を通じて継続的に維持、強化されている様子を見ることができる（図 2)。ただし、今回は遺族へのインタビューを行っていないため、こうした友人たちの投稿による喪の表現を故人に近い親族たちがどのように感じているかは不明であり、表面化していない対立的な感情が潜伏している可能性は排除できない。

「M くーん！
元気？！もぉほんま暑いし雨も降ったりってどーゆーことやねんてな
天国でどーや？友達ふえたか！
たまには〇〇達の隣行ってるか？
もぉ最近なぁしんどくてさどーやったら上手くいくやろ。しんどい時こそ頑張らなあかんって分かってるねん。仕事とか上手いこといかへんし。いつも悩んでまう。やからその時は M くん思い出して頑張ってるねん！
やからもし天国であ、今やばいんやろうなおもたら助けて…
頼むで。夢であいたいからあいにきてな！まってるわ！」
「もう半年もたったんやなー、、
この半年 M が頭に浮かばんかった日ない。ほんまに会いたい
夢にも何回も出てきてくれてありがとうね！
ほんまにあの時に戻れるんやったらこうしたいって思うこと多すぎるからいつか会える時にいっぱい話したい笑
どんなけ時間経っても M のことは忘れやんよ～！また会いに来てね！」

（図 2) M 氏の追悼サイトに投稿されたメッセージの例 (故人の名前や個人情報に関わる部分は引用者によって編集済み)

3-3. 「想いでサイト」の使用例②墓とのつながり

上記のように、想いでサイトは欧米で行われている議論に即した使用のあり方が観察できる一方で、欧米型のメモリアルサイトには見られない使われ方もしている。そのひとつが、個人単位での利用を想定している Forever Missed のプラットフォームとは異なり、想いでサイトではサイトを家族単位、さらに言えば家墓単位での利用を可能とするように独自の仕様変更が加えられているという点である。

例えば 2022 年時点での調査になるが、想いでサイトに公開されている 62 件の追悼ペー

ジ[13]を分類してみると、3 分の 2 以上の利用者（42 件）は元々の趣旨に沿い個人単位でページを作成している一方で、3 分の 1 程度の利用者（19 件）が家族単位での追悼ページを作っている[14]。これらのページには、故人の写真ではなく墓の写真が掲載されていることも多く、「家族のページ」というよりは「墓のページ」と言っても良いような体裁になっている。実際、そこに掲載されている情報も、墓所の位置情報（Google map へのリンク）や菩提寺、墓に眠る故人の没年月日、なかには石材の種類や工法まで記載され、墓参りの記録としても活用されている事例がある（写真 2)。これはスマートシニアが 2021 年より、オンライン上でお墓の管理をできるように想いでサイトのサービスを拡張させたことに起因しているが[15]、それ以前からスマートシニアでは全国の霊園や石材店とパートナーシップを結び、墓を購入した人々がオプションで墓石に QR コードを付けることで想いでサイトを利用できるようにしていたことも関係している。墓参者は QR コードを通じて、墓石単体では不可能な故人の写真や音声などさまざまな情報に触れられるほか、家族が墓の遠方に住んでいる場合は、墓から離れて暮らす家族だけで管理するのではなく、寺院や霊園、石材店がともに墓のページを管理することで、墓の位置や施工法などの正確な情報を共有し、清掃等の代行サービスを依頼することもできる。故人を追悼するための欧米型のメモリアルサイトはいまや、日本の墓文化と融合しつつ、遠隔から家族の墓を管理するためのツールとしても使われているのである[16]。

---

[13] 2022 年 1 月 22 日時点で公開されている全 84 件のうち、サンプルとして関係者が作成しているもの等を除く。

[14] 以下の表は 2022 年 1 月 22 日現在、想いでサイトで一般に公開されている、実際に利用者が作成した 62 件のページの利用法を分類したもの。なお、この想いでサイトで作成されているページ自体は非公開のものを含むと 800 以上あり（2022 年時点)、ここでは全体の 10 分の 1 以下のデータを扱っているに過ぎず、全体の傾向を正確に示すものではない。

分類	件数	掲載されている情報	備考
個人	42 件	故人の生い立ち、故人の写真、墓所の位置情報など	うち生前と思われるもの 8 件
家族	19 件	墓の写真、墓所の位置情報、故人の没年月日、石材の情報など	
その他	1 件		

想いでサイトの公開ページ（https://www.tsuitonet.com/findmemorial/）より報告者作成（2022 年 1 月 22 日時点）

[15] スマートシニア「【お墓の管理】をネット墓で可能に」（https://smartsenior.jp/stone_management/, 2022 年 1 月 27 日閲覧)。

[16] ただし、想いでサイトの機能は常にアップデートや改良が重ねられており、ここで示した議論はあくまで調査時点（2021 年～2022 年）での仕様を元にしたものである。

（写真 2）石材店が公開している家族利用の事例。墓所の位置情報や墓に眠る故人の情報が記載されている。「想いでサイト」より。

4. インターネットは死者との向き合い方をどのように変えたのか

以上のように、日本で運営されているオンラインメモリアルサイトでも、西洋社会で議論されてきたような悲嘆の共有や継続する絆を観察することができ、インターネットというバーチャルな空間の出現が私たちの喪のあり方に与える影響を確認できた。特に顕著なものとして指摘できるのが、メモリアルサイトというオンラインの空間が、家族や親族以外の広範囲に及ぶ人々がフラットな立場から故人への追悼の意を示す場となっている点である。日本ではかつて葬儀が地縁や社縁でつながった大規模な共同体の行事として営まれていた時代を経て、葬儀や納骨、その後の年忌法要を含む供養にかかわる行事は、現在、核家族を中心としたものへと縮小しつつある。不況や「周囲に迷惑をかける」という理由から、自身の葬儀に関しては簡素なもので良いと考える人も多く[17]、実際、現在の葬儀の形式は、従来主流であった近所・友人・勤務先関係など幅広い人が参列する一般葬から、家族・親族を中心とした家族葬が主流となっている[18]。このように、喪に服する行為がますますプライベートなものになっていく傾向は、同時に家族という共同体の外側にいる人々――故人の友人や近所・勤務関係の知り合いたち――が、故人を失った自分たちなりの悲しみを表現し、共有する機会を損なうことにもつながっている可能性がある。オンラインメモリアルサイトは、こうしたプライベートな方向へ進む喪のあり方を、従来とは違った形で外側に開いていく場として捉えることができるのである。

一方、故人との継続する絆はたしかに想いでサイトでも確認できたが、そもそも「継続す

---

[17] （株）冠婚葬祭総合研究所（2018）「CORI レポート：葬祭等に関する意識調査」p.4。2018 年に全国 3000 名の男女を対象に行われたこの調査では、自身の葬儀について、「家族や親族だけで行う葬儀にしてほしい」は 57.0%、「直葬（通夜や葬儀告別式を行わずに火葬だけを行うもの）にしてほしい」が 22.0%と小規模な葬儀を望む声は 8 割近くを占め、「友人やお世話になった方も参列できる一般的な葬儀にしてほしい」は 17.4%にとどまった。

[18] 日本消費者協会（2022）「第 12 回「葬儀についてのアンケート調査」報告書」p.29-31。

る絆」という概念が日本の先祖祭祀に関わる実践から着想を得られたように[Steffen & Klass 2018]、もともと墓や仏壇という場において故人に直接語りかける行為は、日本では死者供養の文化を背景として一般的に見られるものであった。したがってメモリアルサイトにおいてもそうした死者への語りかけが見られるのは何も不思議ではないように思える。しかし冒頭でも述べたように、近年では死後の弔いの場であった墓や仏壇を維持する基盤が崩れており、墓を持たない選択をしたり、改葬して墓石を撤去する「墓じまい」がじわじわと増える一方[19]、住宅事情の変化から自宅に仏壇を置かない家庭も多くなっている[石井 2007：74-78]。このような死者と交流するための装置の解体は、手を合わせたり線香をあげたりなどの、「追悼の気持ちを表す定型化された行為」を衰退させることにもつながっている[山田 2018]。従来の死者儀礼に裏付けられた定型が失われつつある現在、死者との新たなつながり方は、遺骨を身につけたり自宅に置くなどの「手元供養」としても広がっているが、そうした実践は主に故人の配偶者や子供、親などのごく近親の関係性に限られ、プライベートな喪の方向性を促進している。それに対しメモリアルサイトにおける故人への語りかけは、誰でもがフラットに、自分なりの自由な形式で追悼の気持ちを表し、しかもそれを他者とも共有する場を可能としているのである。

ただし、先にも触れたようにインターネットは完全に「自由な」空間ではなく、そこにおける人々の振る舞いは、たびたび指摘されているように、他の人々が見せる規範へ同調したり、あるいは従来の文化的伝統に影響を受けたりする[Brubaker et al. 2013:156]。想いでサイトの事例では、欧米型のメモリアルサイトのプラットフォームを使用しているにもかかわらず、日本向けのカスタマイズによって従来的な家墓の伝統を保持していく方向でも機能しており、むしろ文化的規範の継続が新たなテクノロジーによって可能となっている事例としても捉えられた。実際に日本では、死者の追悼をメモリアルサイトという形で完全にオンラインに移すよりも、実際にある墓を、インターネットを通じて維持・管理するオンライン墓参の方が盛んに行われているように見える[20]。情報技術の進展は、「新しい」「自由な」追悼を可能にするというだけでなく、これまでの伝統を従来とは違った形で維持する方向へと動いていくという側面も備えていると言える。

---

[19] 朝日新聞 2023.12.22「墓じまい過去最多 15 万件超」
https://www.asahi.com/articles/ASRDP3JJ0RDNOXIE01L.html, 2024.3.31 最終アクセス。

[20] 例えば日本最大級の霊園である静岡県の富士霊園では、墓参に赴けない人々のために、自宅のパソコン等から墓の写真を参拝できる「ネット墓参サービス」を行っている（https://www.fujireien.or.jp/net/worship/login.html, 2024.3.30 最終アクセス）。実際の墓の写真や動画を見ながら遠隔で墓参できるサービスは、ほかにもお墓参りアプリの「セレモビ」や（https://www.ceremonymobile.com/, 2024.3.30 最終アクセス）、アイキャン（株）が提供する「ネットお墓参り」などがある（https://www.i-can.jp/memorial/net.html, 2024.3.30 最終アクセス）。

5. 結論に代えて

死者を追悼し、悲嘆を共有するあり方は、その時代の情報技術の展開の仕方に依存しながら時代とともに移り変わっている。しかしながらそうした技術が国境を超えて人々の生活を大きく変える一方、弔いの方法が世界中で均一な変化を遂げるかと言えばそうではなく、その技術の使われ方は、当然ながら当該社会の文化的伝統によっても大きく左右されるのである[21]。インターネットやスマートフォンの普及は世界中の人々の生活を一気に変貌させたが、それによって死や死者がどう扱われるかは、最終的には私たちが死者をどう弔いたいのかという点にかかっていると言える。

【参考文献】

Arnold, M., M. Gibbs, T. Kohn, J. Meese and B. Nansen 2018 *Death and Digital Media,* Routledge.

Bell, J., L. Bailey & D. Kennedy 2015 "'We do it to keep him alive': bereaved individuals' experiences of online suicide memorials and continuing bonds," In *Mortality*, 20(4): 375-389.

Brubaker, J. R., G. R. Hayes, and P. Dourish 2013 "Beyond the Grave: Facebook as a Site for Expansion of Death and Mourning," In *The Information Society*, 29: 152–163.

井上治代 2004「配偶者喪失と核家族の死者祭祀」」長寿社会開発センター『生きがい研究』10：65-84。

井上章一 2013『増補新版 霊柩車の誕生』朝日新聞出版。

石井研士 2007『データブック 現代日本人の宗教 増補改訂版』新曜社。

Kasket, E. 2012 "Continuing bonds in the age of social networking: Facebook as a modern-day medium", In *Bereavement Care,* 31(2): 62-69.

Klass, D., P. R. Silverman and S. Nickman (eds.) 1996 *Continuing Bonds: New Understanding of Grief*, Routledge.

Marshall, L. 2000 "Some Shadows of Eternity: the Internet and Memorial to the Dead," Department of Computing Science Technical Report Series 718, https://eprints.ncl.ac.uk/160678.

Maddrell, A. 2012 "Online memorials: the virtual as the new vernacular", In *Bereavement Care*, 31(2): 46-54.

内藤理恵子 2013『現代日本の葬送文化』岩田書院。

中野明 2017『IT 全史——情報技術の 250 年を読む』祥伝社。

宮澤安紀 2020「現代イギリスにおける死生学の特徴とその動向——雑誌 Mortality の分析

[21] 例えば多民族国家であり欧米の文化も積極的に取り入れているシンガポールでは、コロナ禍において一時期オンラインメモリアルは機能したが、収束以降は従来の対面での会葬が重んじられ、現在は低調であるという（2024 年 1 月 19 日 Ang Chin Mo 社への聞き取りより）。

を中心に――」公益財団法人国際宗教研究所『現代宗教 2020』209-238。
坂口幸弘 2022『増補版 悲嘆学入門』昭和堂。
Steffen, E. M. & D. Klass 2018 “Culture, contexts and connections: a conversation with Dennis Klass about his life and work as a bereavement scholar,” In *Mortality*, 23:3, 203-214,
瓜生大輔 2023「デジタル時代の弔い方」山田慎也・土居浩編『無縁社会の葬儀と墓』吉川弘文館：17-36。
Walter, T., R. Hourizi, W. Moncur and S. Pitsillides 2012 “Does the Internet Change How We Die and Mourn? Overview and Analysis,” In *OMEGA - Journal of Death and Dying*, 64(4): 275-302.
Walter, T. 2015a “New mourners, old mourners: online memorial culture as a chapter in the history of mourning,” In *New Review of Hypermedia and Multimedia*, 21 (1–2): 10–24.
Walter, T. 2015b “Communication media and the dead: from the Stone Age to Facebook,“ In *Mortality*, 20(3): 215-232.
山田慎也 2011「遺影と死者の人格――葬儀写真集における肖像写真の扱いを通して」『国立歴史民俗博物館研究報告』169：137-166。
山田慎也 2018「供養はより自由なかたちへ」『終活読本ソナエ』秋号 2018：95。